佐伯鶴城新聞

since 1911
第88号
編集所
大分県立佐伯鶴城高等学校新聞部
編集責任者
吉田　真悟

「最後まで粘り強く」
2次試験の対策が進む

センター試験が1月13・14日に行われた。3年生は前期試験に備えて学習を続ける。進路指導主任の小野鉄次郎先生と本番を控える3年生3名に心構えを聞いた。

センター試験が1月13・14日に行われた。進路指導主任の小野鉄次郎先生（地歴科）は「文・理とも昨年度に比べ平均点に変化は無かったが、思考力を問う問題がみられるようになった」と話す。

3年生はセンター試験終了後、自己採点を行う。自分の点数と全国から集められた結果を参考にして志望校を決定。現在2月25日の前期試験に向け頑張っている。小野先生は「途中結果に左右されず、最後まで粘り強く勉強してほしい」と受験生に呼びかけた。

二次試験を控える3名に意気込みを話してもらった。小論文に取り組む河野泰己さん（三―四）は「新聞や新書を読んで医療に対する知識を深めている。本番では落ち着いて書けるようにしたい」と語る。金田麻佑さん（三―三）と久根田有彩さん（同）は「新聞の切り抜きからキーワードを含む本を探して読んでいる」と金田さん。久根田さんは「マーク形式ではなく記述形式になるのが辛くもあるが慣れておきたい」と話してくれた。

本番までに対策をしなければならないのは体調管理も同じだ。養護教諭の大石美紀子先生は「3年生からインフルエンザがほとんど出ておらず、気をつけていることが感じられる」と話す。また「熱がそれほど高くなくても、早めに病院で検査を受けてほしい。こまめに手洗いうがいと、最低5分間の換気をすることが大事」と話してくれた。

（吉田　真悟）

受験勉強に打ち込む３年生

SSH
佐伯の防災について知る
大分大学の先生を招いて講演

1年生は1月25日、SSH科学講演会に参加し、お招きした講師の先生による話を聞いた。今回話していただいた先生は、大分大学減災・復興デザイン教育センター（CERD）代表、小林祐司准教授。『身近な環境から考える減災・防災について』をテーマに高校生にも分かりやすく教えてくださった。

講演を聞いた河津瑞希さん（一―二）は「東北の震災を通して、防災に対する佐伯の弱いところが知ることができて良かった」と話す。また「小林先生から『ハザード×脆弱＝災害』という関係式を初めて聞いた。脆弱な要素を小さくすることが減災に繋がるという話が印象に残った」と興味をのぞかせた。

（吉田　真悟）

減災への取り組みを呼びかける小林先生

男子バレー部
「最高の試合をしたい」
県ベスト4で九州大会へ

県大会でベスト4入りを果たし、九州大会出場を決めた男子バレー部。部長の古戎航太郎さん（二―三）に大会の感想を聞いた。

「作戦をしっかりと練って試合に臨んだことが勝利につながった」と話す古戎さん。ベスト4を決めた大分上野丘戦では「ケガ人も出てチームの調子自体は良くなかったが、繋ぐバレーを徹底することができた」と振り返った。

沖縄県で行われる九州大会に向けて「相手は自分たちよりも格上のチームばかり。雰囲気にのまれず、最高のバレーをしたい」と抱負を述べた。（橘　健太郎）

力強いスパイクを放つ

合縁奇縁 第13回

高校時代はダンスクラブ
ALT Karen Malone先生

第13回目に紹介するのは、今春赴任されたカレン・マローン先生（ALT・英語同好会顧問）。カレン先生に、趣味やアメリカの高校時代のことを聞いた。

【好きな食べ物】ペパロニチーズピザとアイスクリーム。アイスは週に1回ほど食べる。

【趣味】物語を書くこと。これまでにたくさん書き始めたが、どれも完結していない。

【好きな音楽】イギリスのバンド『マムフォード・アンド・サンズ』。

【高校時代の部活動】学校のダンスチームに所属。バスケットボールの試合があると、応援と余興を兼ねて踊ることがあった。

【好きなもの】自由時間。テレビを見ることとインターネットが好きで、休みの日はテレビばかり見ることも。

【最近覚えた日本語】「なかなか」

【行ってみたい国】ヨーロッパで歴史的な建造物を見たい。

【得意な教科】数学。大学では数学を伝うことが好きだったため。

【英語学習のアドバイス】まず初めに「英語を話すこと」が重要。上手くないと思っていても話してみましょう。

（吉田　真悟）

笑顔を絶やさない

触角

3年生はいよいよ受験、卒業も近くなっている。春は別れの季節。先輩・後輩ともに思い残すことが無いようにしたい▼1年前の3月に先輩4名が新聞部を去った。面白い話で部を盛り上げてくれ、引退後の忙しい時期も、部のために動いてくれるほど優しかった。いなくなった後は記事を作る自分に頼りなさを度々感じ、追いつめられると、先輩に戻ってきてほしいと思ってしまう▼昨年の県総体で取材の為に陸上競技場を訪れた。積み上げてきたものを出し尽くしながら疾走する3年生。そして応援する1・2年生の姿が印象に残っている。先輩を大切に思うのはどの部活動も同じなのだと感じ、また意志を継いで部を引っ張っていく人を応援したい気になった▼いなくなったことを嘆くばかりではない。文章を創作するのが苦手な私は、いつもこの『触角』を書くのに手間取ってしまう。そんなときは今まで発行された新聞を読み返してアイデアを貰っている。卒業した先輩方はもう部室にいないが、残してくれたものに現在も支えられている▼それぞれの部で先輩が何かを残していくのだ。記念品やノウハウ、もしかすると新たな目標もあるかもしれない。気が早いが、半年後はもう引退シーズン。先輩がしてくれたように、それまでに私たちは何か残せるだろうか。

科学 文芸 魅力あふれる 文化部の活動を紹介

文化部の活動を紹介するこのコーナー。第２回目の今号は、科学部の実験と、文芸部の作品の２本立てでお送りする。

科学

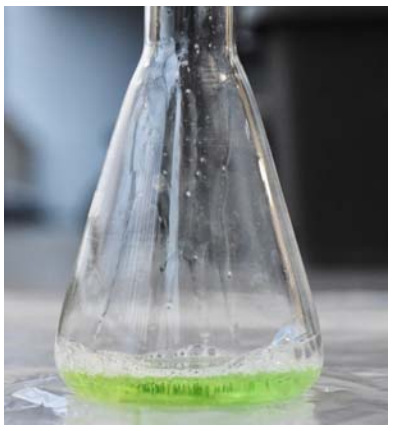
一宮昌樹さん（１―５）

科学実験～象の歯磨き粉～

ここでは、普段の科学部の研究から少し離れたミニ実験を紹介する。今回取材に協力してくれたのは、部員の一宮昌樹さん（一―五）。一宮さんは「以前自分で行った実験より、もっと反応が激しくなるように心掛けた」と話す。

【用意するもの】
・35％の過酸化水素水（50ｍＬ）
・ヨウ化カリウム（３ｇ）
・イースト菌を代わりに使ってもよい
・台所用洗剤（界面活性剤を多く含むもの）
・食用色素

【実験方法】
①メスシリンダーで過酸化水素水を50ｍＬを測りとる。（注意：過酸化水素は有毒なので、手についたらすぐ洗い流す）
②メスシリンダーに台所用洗剤を25ｍＬを入れる（過酸化水素水：洗剤＝２：１）。
③食用色素を少量の水で溶かし、メスシリンダーに入れる（見た目をカラフルにするため。今回は黄色い食用色素を使用した）。
④軽く回すようにして混ぜ、三角フラスコに移す。
⑤ヨウ化カリウムを３ｇ正確に量りとり、三角フラスコに加える。



①溶液にヨウ化カリウムを投入

②すぐに反応が始まった

③とうとう泡が口から溢れ出る

④ついにフラスコをのみ込んだ

反応が始まった

ヨウ化カリウムをフラスコに入れると、反応が始まった。泡は、フラスコの底からゆっくりと沸き起こる。30秒ほどで泡は口から溢れ出た。２分ほどで、とうとうフラスコが隠れるまでに成長した。

『象の歯磨き粉』正体はただの酸素だった

Ｑ：「象の歯磨き粉」の正体は何ですか

一宮：ズバリ、化学反応によってできた酸素です。過酸化水素が分解されることによって、水と酸素が生まれます。その中で酸素が泡となって出てきました。

Ｑ：なぜ「象の歯磨き粉」と呼ぶのでしょうか

一宮：発生した泡が歯磨き粉に見えることと、その量が大量であることから名前が付きました。

Ｑ：ヨウ化カリウムは反応にどう関わったのですか

一宮：ヨウ化カリウム自体は変化せず、化学反応を促進する「触媒」として働きました。

Ｑ：屋外で行う方がいいのですか

一宮：泡は片づけるのが大変で、一度手につくとなかなか落とせません。実験は汚れても良いように屋外で行うのがおすすめです。

$$2H_2O_2 \longrightarrow 2H_2O + O_2$$

（過酸化水素）　（水）　（酸素）

発生した酸素が泡をつくる

文芸

【短編小説】悪くねぇ

根塚拓実さん（三―三）

がちゃり。家のドアを開ける。電気もついておらず、靴もない。なんだ、誰もいないのか。それが分かるとなると少し開放的な気分になる。いつも親に抑圧され続けていた反動ってやつか。・・・ちがうか？ちがうな。上がってすぐに冷蔵庫をあけると缶ビールが数本。それしか飲み物がない。

「まともなもんねぇじゃねぇか」と不満を声に出す。すると、「ああ、あんた帰ってたの。ただいまぐらいちゃんと言いなさい」という声がする。

「あん？いたのかよ。つか、昼間から酒飲んでんじゃあねぇよ」と、俺があきれながらに口にすると、黙り込んだ。

家はそこそこ裕福で生活には不自由はなかった。しかし、家庭環境は最悪。父は外国で別の女を作ってるし、兄妹はさっさと独り立ちして連絡は一切ない。母は酒と仕事に没頭。そりゃあ、こうなるよ。「あーあ。俺、今日誕生日だったのに」と、自然に口に出た。すると、母は俺を睨んでくる。「お金はあげてるでしょ」まあ、そうなんだが。「大体親の金で生活している癖に甘えたこと言わないでくれる？学校辞めて就職してもいいのよ」おお、言いやがった。まあ、あのクズどもと顔を合わせないですむのはよさそうだ。なんとなくイライラしたのでとりあえず手ごろな机を蹴っ飛ばし、外に出る。母が何か言っているが無視だ。

飲み物が冷蔵庫になかったことを思い出し、コンビニに向かう。店内に入ると気の抜けたバイトの声が聞こえる。まず、ドリンクのコーナーに行く。すると、最初にチューハイが目に入る。足を止めてみる。見てるだけです。「ちょっと、あんた未成年だよね」と、声をかけられた。まあ、そいつも未成年っぽいのだが。「ちょっと、見てただけだよ」と答えると興味なさそうに「そうか」と言った。

コーラと適当なお菓子を買ってコンビニを出た。外は雨が降っていた。「あんた傘二本もってる？」さっきの奴だ。「持っているわけねぇだろ」と返すと「そうか」と特に気にしていない様子。「俺さ、今日誕生日だったんだよ」不思議と自然に出てきた。こいつ、初対面なのに。「へーおめでとう」そっけなくそう言い、袋をごそごそとあたると不意に何かを投げてきた。「やるよ」と一言。なんか、不思議だ。「サンキューな」と一言。見るとお茶だ。爺臭いな。雨はまだ降っている。ざあざあと激しい音を立てている。こいつを見ていると少し、ほんの少し学校のクズどものことも、アホみたいにこじれた家庭環境もどうでもよく思えてきた。少しは家に帰っていい子をしてみよう。あのクソばばぁが驚く顔が目に浮かぶ。そんなことを考えながら雨宿りを止めて歩き出す。「おい、あんた風邪ひくぞ」と呆れたような声が聞こえる。その声を後ろに奴に手を振り、「じゃあな」と手を振り返す。今年、悪くねぇ誕生日だ。

です。何とか形にすることが出来ました。

もともと私の頭の中だけの出来事なので、こうして文章にすることはないと思っていました。しかし、この機会をもらい、文章に出来ました。私の作ったお話で何か皆さんにプラスになるものが得られれば幸いです。